

日本エアテック 社内報



2025年 秋号

発行：日本エアテック 企画管理部



日本エアテック社内報



2025年
秋号

【発行】
日本エアテック
企画管理部



KEYMAN's INTERVIEW



キーマンズ・インタビュー

—— 当社の鍵を握るあの人に、聞いてみたいことがある。 ——

KEYMAN's INTERVIEW

今回のキーマンズインタビューは、量産がスタートしたFAN HUB塗装に携わる4名にご登場いただき、2023年春の社内報でも取り上げたFAN HUB塗装ですが、量産にあたりどのような苦労や現場の変化があったのか？当事者の皆様から、興味深いお話を伺うことができました。

—まず、遠藤さん以外の方は生産特殊工程課のご所属ですが、生産特殊工程課とはどのような部署なのでしょうか。

林 (株)JATにおいて、2025年9月1日付で組織改編された部署になります。文字通り特殊工程の生産を担当する部署で、塗装のほか接着や前号で取り上げたショットピーニングも、生産特殊工程課の業務です。

松尾 これから立ち上がる特殊工程の製品もありますので、今後益々重要な部門となります。個人的には、社内でも今一番ホットな部署だと思っています(笑)

—次にFAN HUB塗装について、あらためてどのようなものか教えてくださいいただけますか。

遠藤 まずFAN HUBは、航空機のターボファンエンジンの入り口側



(株)JAT 生産促進班 遠藤 芳邦さん



(株)JAT 生産部 生産特殊工程課 林 幸司さん

に付く、ファンを構成する重要部品です。PW1100GJMという航空機エンジンに搭載されるFAN HUBの塗装を、今回お任せいただくことになりました。お客様の方で加工されたFAN HUBを、当社に運んで洗浄と塗装を行います。

林 塗装に使用するのは、固体潤滑剤です。回転するファンの構成部品同士が接触する部分の滑りをよくすることで、破損と摩擦を防ぐことができます。潤滑剤というと油がメジャーですが、油は発火してしまうためエンジン入口のFANに使うことはできません。そのため固体潤滑剤を塗布する必要があります。

—お客様からの依頼は、いつ頃にあったのでしょうか。

遠藤 お話自体は2019年にいただいていたのですが、コロナ禍で延期となり、2022年に再スタートしました。

松尾 諸々の準備も、2022年から本格的に始まりました。もともと神戸工場の塗装職場は、明石工場や千種工場で加工した発電用ガスタービンエンジンをはじめとする

部品の有機塗装を行うために立ち上げたものです。FAN HUBは有機塗装と無機塗装の両方を行うため、FAN HUB塗装を開始するにあたり、無機塗装用ブースを新設しました。

—一人の教育に関してはいかがですか？

林 まず、松尾さんには3ヶ月間研修に行ってもらい、一連の工程を習得していただきました。その技術を、現在塗装を担当している橋本さんが学び、塗装工程の作業者認定を取得しました。

橋本 今回の塗装作業は、作業者認定を取得した人のみが作業を行える高度な作業になります。私はこの5月に塗装職場に異動となりましたが、松尾さん以下関係者の丁寧な教えを受け、8月に作業者認定を取得することができました。今後は、量産に向け更なる技量の向上に努めていこうと思います。

遠藤 橋本さんは突然のことに驚いたかもしれませんが、生産特殊工程課のこれからの担う人材になってほしいと声をかけさせてもらったんです。



(株)JAT 生産部 生産特殊工程課 橋本 雅俊さん

です。

—それでは橋本さん、初めて塗装をやってみて、いかがでしたか？

橋本 一見すると綺麗、というレベルならすぐ塗れるようになったのですが、塗りづらいうところまで均一に塗装するのは難しかったです。正面は塗りやすいのですが、返りがついていない部分は形状に応じた角度の調整が難しく、作業者認定を取るまで、毎日塗装の練習をしていました。

松尾 正直、塗装は誰でもできる作業ではなく、センスも必要です。

遠藤 塗装の厚みは、8〜17マイクロメートル。この厚みを手作業で均一に塗布していきます。塗装後の厚みを測る膜厚計はありますが、量産品では確認することはできないので、認定された作業者が仕上げたという事実が、品質の保証になってきます。

—FAN HUB塗装の今後の展望について教えてください。

林 月産15台で9月より開始しましたが、お客様からは今後もっと多くのお引き合いをいただいで

います。生産数増加に向けて現場をレベルアップさせていくのが、当面の目標です。

遠藤 決められた作業手順の中で、どのように効率を上げていくかをみんな考えています。

橋本 そうですね。製品の流し方など、工夫できるところはまだまだ残されていると感じています。立ち上がったばかりで改良が必要なので、そういう

ことを考えながら仕事ができるのはやりがいになっています。工程の変更は許されていませんが、作業の分担等を見直し、更なる生産性向上に繋がっていきます。

松尾 あとは仲間を増やしていきたいと考えています。量産前は私がほぼ1人で準備をしていましたが、例えばこれからは分業制にするなどして、各工程のプロフェッショナルを育てていきたいです。工程ごとに習熟度の高い人材がいれば、品質が安定するだけでなく効率も上がります。

—設備の活用に関してはいかがですか？

林 FAN HUB塗装のために用意した設備ですが、FAN HUB製品以外の塗装にも活用していきたいと感じています。当社としては一貫生産を目指していますので、中長期的には前後の工程と繋げていきたいです。

遠藤 お客様からは塗装を初めとして、当社に特殊工程の更なる生産拡大を求められています。当社としても、今後の会社のひとつの柱となるビジネスに育てていきますので、皆さんご協力をお願い致します。